

## サルデーニャ(ヌオーロ) での考古学発掘プロジェクトへの参加



\*赤い点がヌオーロ

### サルデーニャ

サルデーニャ島は、シチリアに次ぐ地中海第2の大きさを誇る島。地中海世界の中でも独特の位置を占め、また、イタリア本土から孤立しているため、独自の文化を育み、その風土性を濃密にとどめてきた。

この島には、古代からの記憶が受け継がれた場所が多く、至る所に古代の巨石文化を物語る「ヌラーゲ(Nuraghe)」という構造物が存在する。紀元前1500年頃からローマ人に征服される紀元前3世紀頃までにつくられたヌラーゲは、その役割や機能もまだ完全には解明されておらず、神秘に包まれている。

### ヌオーロ

ヌオーロ県は、サルデーニャ州の中央辺りに位置し、島の東海岸から西海岸まで広がっていて、約7000平方キロメートル。丘や山が多いのが特徴で、森林などの自然がそのまま保たれている。野生の荒々しさが残るこの辺りは、バルバージャ(野蛮人の土地)と呼ばれ、ヌオーロ市はその中心地。

今回発掘に参加したオルーネ市はヌオーロ市の北側に位置する。

### 目的

イタリアはサルデーニャ島北部にあるサッサリ大学文学部考古学学科では、毎夏、学生への教育プログラム(発掘実習)を兼ねた発掘調査を行っている。このプログラムへの参加は他大学の学生にも広く公募されており、特に発掘未経験者に対しても丁寧な教育指導を行うことで知られている。今年のプログラムは、サルデーニャ島中東部ヌオーロ(Nuoro)県オルーネ(Orune)市郊外、初期キリスト教時代(5世紀半頃)の聖堂跡発掘現場において行われる。この旅行の目的は、約3週間にわたってこの発掘プログラムに参加し、イタリア本場の考古学を実地に体験すること、また、現地での共同生活・共同作業を通して、イタリア人研究者や同世代の参加学生と交流を深めることを目的とする。

### 詳細

2008年 サンテフィジオ(Sant'Efisio)地区発掘プログラムへの参加

主催：サッサリ大学 文学部考古学科

オルネ市(ヌオーロ)考古学監督局

協力：オルネ市, サルデーニャ銀行

場所：オルネ市・サンテフィジオ地区(サルデーニャ州ヌオーロ県)

期間：第二期発掘 2008年8月10日～8月30日

プログラム内容：

- ・ 初期キリスト教時代(5世紀中頃)のものと考えられる聖堂跡の発掘
- ・ 参加者への発掘技術教育

## 日程

1日目：サルデーニャ到着、オルネへ。発掘メンバーと対面。

2日目：プロジェクトリーダーからの挨拶と概要説明。発掘現場での詳細説明。

3, 4日目：3つのグループ(教会跡・2つの建造物跡・6つの部屋跡)に分かれ、現場での作業開始。

5日目：発掘休み。現地の友達と海へ。

6日目：ヌオーロのサルデーニャ生活・民族伝統博物館 (Museo della Vita e delle Tradizioni Popolari Sarde)

7日目：ヌオーロのオルトベーネ山へ。

8日目：発掘の続き。

9～10日目：現場の検査が入る。

11日目：Sutenpiezuへ。午後はLaboratorio(作業場)での作業。

12日目：ノッテ・ピアンカ(notte bianca:夜中じゅう町が音楽やダンスの舞台となる祭り)へ

13日目：ヌオーロのオルトベーネ山へ

14日目：レデントーレ(Sagra del Redentore)へ。S.E地区発掘中止の記事が新聞に。

15日目：パレストラ着。

16日目：発掘現場のデザイン作業。

17日目：ヌラーゲ(nuraghe)へ。

18日目：オロゼイ(Olosei)の海へ。

19日目：最後の会食ランチ。修了書をもらい、その日のうちにパレストラを出る。

20日目：ヌオーロを観光後、サルデーニャを去る。

21～27日目：ローマにて各自研究

28日目：ローマ発

29日目：福岡着

## 発掘について

日本人を含む発掘メンバー約30人がそれぞれ3つの発掘場所に分かれて作業した。

その内、日本人2名を含む約10人が2つの建物跡を担当。

発掘現場の詳細や出土品については相方の堀松さんが説明してくれているので、ここでは割愛する。

私は実際の発掘手順について述べることにする。

## 発掘手順

①まず、現場監督(Fabrizio)が現場を見極め、指示を出す。



1



2

②木を切る。危険な作業であるため、担当の木こりのおじさんたちが木を切り、その間メンバーは何もできない。

③石を取り除く。重いものは男性がメインで運ぶが、結構な肉体労働である。



3

④正確に区画を決める

⑤杭を立てて、紐で区切る (Fabrizio 指示)



5



6

⑥石を取り除く。初めに比べると比較的細かい石。流れ作業で協力して進める。

⑦葉を取り除く・砂を取り除く。 \*バケツ(secchio)とスコップ (pala)

⑧計測。

⑨地図書き。20分の1に縮尺したものに現場の状況を記していく。

⑩写真撮り。終了。



9



10

今回のプロジェクトにより、発掘の大まかな流れや実際の作業を身をもって知ることができ、貴重な経験になった。聞いていた通り、学生向けの教育プログラムであるため、説明やアドバイスを丁寧にしてもらえたが、挨拶程度のイタリア語の能力では容易く理解できる内容ではないことは、初日から痛感した。毎日言われたことをやることで精一杯であったが、その中でも細かくコミュニケーションをとることの大切さを身にしみて感じた。現地では当たり前のように遺跡や出土品に直に触れていたが、帰国して改めてそのすごさを実感した。サルデーニャはまだ未開拓の土地であり、それだけに想像を超える遺跡たちが眠っているという。その一部に私たちも触れることができたことに心から感謝したいくあ。

次に、週末を利用してヌオーロを観光した際に訪れた博物館と、ヌオーロの祭りについて記す。

### Museo della Vita e delle Tradizioni Popolari Sarde in Nuoro(サルデーニャ生活・民俗伝統博物館)

8/17 サルデーニャの友人にヌオーロを案内され、民俗博物館を訪れた。



博物館正面

この博物館はサルデーニャの最も重要な民俗博物館で、政府直々に建てられた唯一のものである。1960年代初期に建築家の Antonio Simon Mossa の設計により建てられた。

7,000 アイテムを所蔵し、衣装、ジュエリー、織物、木製の置物、マスク、パン、大衆の楽器、器具、伝統的なサルデーニャの家事用具などから構成される。

所蔵物を少しずつ写真を載せて紹介する。

## 伝統衣装

サルデーニャの民族衣装は、特に前世紀に学者や海外やイタリアの旅行者の関心を寄せた。なぜなら、それらは古代地中海世界との関係・つながりを示す衣装であり、そのバラエティと美しさ・裕福さは、伝統的なヨーロッパの服装・モチーフの例として表される。

男性・女性、また子供の衣装が 80 以上展示しており、それらは全て本物の衣装で、島の様々な地理学的歴史的小区画を表す。衣装の保護管理や全てのコレクション展示のため、入れ替えながら展示されている。



デズーロ(Desulo)の民族衣装

## ジュエリー・お守り



豊富な装飾品

ジュエリー・お守りの膨大なコレクションは、島のいくつかの重要な聖域作るように命令されたことから成る重要な部分である。これらの装飾品はの多くは伝統衣装(ボタン、ブローチ、チェーン)の不可欠な部分で、他は個人的なジュエリー(イヤリング、ネックレス、ペンダント、リング)、他は魔よけ、奉納、献納されたもの(ロザリオ、遺品、メダル、十字架)。

これらはシルバーで作られ、金、蠟、金綿細工、透かし彫り、浮き彫り、彫刻(サンゴ、貝、化石化した石、クロス、クリスタル、人造宝石、その他)などがある。

## マスク



サルデーニャの中央・内陸部のバルバージャ地方の羊飼いや農夫のマスク、ベル、羊皮は、中世の人々のルーツに基づいた一連のイベント(魔よけの祭り)に見られる。

←モンスターと牛追い

## パン

600 種以上の伝統的なパンを所蔵。その大部分はもはや製造されていない。形や味によって季節の移り変わり、ワークスタイル、祭り、家族行事、幸せや悲しみなど、サルデーニャの生活を表す。



伝統的なパンで作られた十字架

## 楽器



60 以上のサルデーニャ伝統の楽器を所蔵。世界中で知られたサルデーニャの文化がここにある。左図の写真の笛は、演奏テクニックが難しく、音を鳴らすのに相当な体力がいるようだ。

決して大きな博物館ではないが、サルデーニャの文化が詰まった重要な博物館であると感じた。また、サルデーニャの友人が一つ一つ解説しながら館内を案内してくれたので、自分だけで観るよりも深く理解することができた。それまでほとんど知らなかったサルデーニャの歴史や文化を目で見ることができ、さらなる興味を喚起するきっかけとなった。所蔵品や展示の仕方の美しさだけでなく、館の外観も整えられており、あまり博物館などに行かない私でも、時間を忘れるほど楽しむことができた。

次に、8/24 に行われたヌオーロの祭りについて記す。

### サルデーニャの祭り～Sagra del Redentore in Nuoro～

私たちがサルデーニャに滞在した 8 月には、“Sagra del Redentore”（贖い主の祭り）というヌオーロで最も大きな祭りが行われた。

この祭りの説明の前に、サルデーニャの祭りについて簡単に述べておく。

サルデーニャでは年間を通じて多くの祭り(約 2000 程)が行われ、どの祭りも個性的且つ古い伝統を感じさせるものである。さらに、歴史や文化の多様性をもつサルデーニャでは、地域や町によって祭りが大きく異なり、



民族衣装に身を包んだ人々、聖櫃を担いで町中を練り歩く敬虔な宗教行列など、祭りは普段見えにくいソフトな面を浮き上がらせる。

サルデーニャの祭りは、敬虔なキリスト教徒の儀礼を主体とするが、随所に異教的かつ土着的な要素が入り込み、不思議な魅力を秘めている。また、祭りによっては神話のようなストーリー性があり、土着的な衣装をまとった架空の人物たちが練り歩き、町や聖域は演劇空間に転じる。先住民の時代から受け継がれてきた古い伝統や慣習が、祭りを通じて色濃く表れるのだ。

その代表的なもので、ヌオーロで最大の祭りが **Sagra del Redentore**。

オルトベーネ山の頂上に救世主イエスの大きなブロンズ像が建てられた 1901 年にこの祭りは始まった。法王レオーネ 13 世が 1900 年の聖年を記念し、イタリアの 20 の山の上にイエス像を献納するように命じた。サルデーニャではヌオーロの町を見下ろすオルトベーネ山の頂上選ばれた。

この祭りは毎年 8 月 29 日に開かれ、そこで宗教儀式がとり行われる。一方、町では、お祭りの直前の日曜日かそのすぐ後の日曜日に民族フェスティバルがあり、サルデーニャ島各地の衣装を身に付けた人達のパレードがある。

私たちが観たのは 8/24(日) に行われた民族フェスティバル。

10:00～：サルデーニャの伝統的な仮装行列



マムトネスと呼ばれる黒いマスクに羊飼いの衣装を身に付けた人や、羊の皮で身を包み、顔には野獣に見立てた黒いマスクをつけた人が肩にいくつもの牛や羊のベルを背負い、町中を練り歩く。リズムカルに踊るマムトネスを赤い衣装をまとった牛追いがロープで捕まえようとしながら、町中を巡る。

この儀礼の起源は、先史時代の豊饒を祝い、邪悪なものを取り除く儀礼に遡るとされる。神秘的な人物マムトネスの語源は、遙かメソポタミアのシュメール語にあるという。

私たちがメインストリートに到着した時には、既に多くの観客が祭りの始まりを待ちわびていた。前にその通りを訪れたときは、人通りもそうなくとても閑静だった場所が、やはり祭りを前に人の集まる場所に変わっていた。

そして、民族衣装を着たラッパ・ドラム隊の演奏と共に祭りは始まった。それに続いて、マムトネス(上記)やその他種々のモンスターの行列が、観客を巻き込みながら通りを練り歩く。背負っているいくつものベルを鳴らしながら進む光景がとても異様で、観る者を惹きつける。

初めて目にする光景に驚く私たち日本人もまた、あちら側からすると始めて目にする対象だったのか、互いに

会話や記念撮影など、現地の方々と交流の時間も持つことができた。日本人数名もモンスターたちに襲われ、“Bene esperienza!”と近くにいたおばさんが言っていたが、本当に貴重な経験になった。

#### 15:00～：島全土から集まった約 5000 の伝統衣装の行列

昼を挟み、15 時頃からはサルデーニャ全土から集まった伝統衣装を着た老若男女が通りに姿を現す。このパレードには一般の参加が多く、本当に小さな子供からお爺さんお婆さんまで、様々な世代が通りを華やかに彩る。伝統衣装は町によって少しずつデザインや装飾が異なるが、どれも美しく、今では祭りの時にしか着ないそうでとてももったいないと感じた。

どこか物静かではにかむ表情を見せるサルデーニャの人たちも、こちら側から心を開いて話しかけると、笑顔で写真に写ってくれた。また、オルーネの子供たちが私たち日本人を覚えていてくれて、人ごみの中話しかけてくれたことにとても心温まる思いがした。



#### 18:30～：ヌオーロやその他の都市の伝統衣装を着た騎兵の行列



続いて、騎士たちの行列。細い通りを馬に乗って進むのは難しいらしく、時折観客の方に馬が突っ込むということも少なくない。常にカラビニエーレ(憲兵)が見張っていた。

#### 21:00～：円形闘技場でのショー“Cantande e Ballande a Su Redentore”が行われる。

サルデーニャ全土から集まった約 35 の町の伝統のフォークダンス、アコーディオン奏者やテノール歌手に因るエキジビション



夜はヌオーロの円形闘技場 (Anfiteatro) で “Cantande e Ballande a Su Redentore” というショーが行われた。通る道がないほど人が集まっていたが、前方の場所を確保することができた。約 35 の町が代表してそれぞれの伝統衣装やダンスを披露するのだが、衣装は勿論、歌やダンスに細かな違いがあり、とても興味深かった。初めてこのような場でショーを見たが、夜空のもとで伝統的な音楽や踊りを鑑賞するのは本当に素敵だった。またヌオーロを訪れたいと思わせる祭りである。



8/29 この日にプロジェクトが終了したので見に行かなかったが、早朝に大聖堂から山の頂上にあるイエス像の足元まで巡礼の人達が向かうという催しが毎年行われている。

年間何千もの祭りが行われるというサルデーニャで、偶然どこかの祭りに遭遇することも珍しくないだろうが、サルデーニャ全土から人が集まるこの "Sagra del Redentore" の日にヌオーロに滞在していたのは本当に幸運だった。ヌオーロに居ながらにして全土の文化を垣間見ることができ、また、現地の方々と触れ合うこともできる。私たちはサルデーニャ人の友人数名とこの祭りを観たのだが、彼らのガイドと説明なしでは祭りを理解することはできなかったと思う。また、事前に民俗博物館を案内してくれたことも、祭りをより楽しませるための彼らのホスピタリティーだったと実感した。遠く離れている友人たちにも感謝したい。

旅行全体を通して、目的であった本場の考古学の実地体験、また、現地での共同生活・共同作業を通してのイタリア人学生との交流、そして、実践的イタリア語の修得を肌で感じる事ができた。

このような貴重な経験ができたのは、旅行奨励制度により学生にチャンスを与えてくださっている国際文化学部の先生方のお陰であり、特にゼミ担当の山田順先生にこの場を借りてお礼を言いたい。

\* 参考文献 \*

- ・ 『地中海の聖なる島サルデーニャ』 陣内秀信
- ・ Museo della Vita e delle Tradizioni Popolari Sarde 資料

## 研究旅行要旨

サルデーニャ（ヌオーロ県オルーネ市）での3週間の発掘プログラムに参加し、現地、またイタリア全土から集まったイタリア人数十名、ポーランド人1名と共に共同生活をした。教育的環境の下、イタリア語または英語でのコミュニケーションにより、サッサリ大学の教授や現場指揮官の指導を仰ぎながら作業を進めていった。このプロジェクトにより遺跡の発掘手順を理解でき、それを実地に体験できた。

また、週末の休みやプロジェクトの後半を利用してサルデーニャ観光もでき、民俗博物館や伝統的祭り、ヌラーゲというサルデーニャ独特の古代遺跡を巡るチャンスにも恵まれた。一日中イタリア人と生活するという貴重な経験により、イタリア人の生活スタイルを垣間見ることができ、それと共に自然なコミュニケーションを行うことで語学の上達にも貢献できた。

これらを通して、未知なるサルデーニャの歴史・文化に触れることができ、今後の研究や自分の視野に良い影響を与えることだろう。